

EGFR 遺伝子変異陽性肺腺癌におけるサブタイプ別における臨床病理学的検討

2004年1月から2014年12月までの間に、当院にて完全切除されEGFR遺伝子変異陽性肺腺癌と診断された約230人・100個の病理標本を用いて、臨床病理学的特徴について研究を行います。

研究の概要と意義：

わが国において、肺がんは死亡数をもっとも多いがんです。腺癌は肺がんの中で最も多い組織型で、EGFR遺伝子変異を有することが多いがんです。

2011年に世界肺癌学会 (IASLC)、米国胸部疾患学会 (ATS)、そして欧州呼吸器学会 (ERS) が共同で肺腺癌の分類 (IASLC/ATS/ERS 分類) の提唱し、肺腺癌はLepidic 優位型、Acinar 優位型、Papillary 優位型、Solid 優位型、Micropapillary 優位型の5つのサブタイプに分類される。外科切除された肺腺癌を対象とした臨床病理学的検討において、この5つのサブタイプは予後を反映し、Solid型は予後不良であることが報告されていますが、EGFR遺伝子変異陽性肺腺癌に限定した報告はほとんどありません。

また、以前、私たちは免疫染色法を用いてSolid優位型肺腺癌は他のサブタイプと比較してlaminin-5、fibronectin や vimentin が高発現していることを報告しました。さらに、私たちはがん周囲の微小環境を構成するPodoplanin陽性の線維芽細胞が予後不良因子であることを明らかにしました。このようにSolid優位型を構成する腫瘍の表現型やがん周囲の微小環境の違いが肺腺癌の予後に影響を与えることが考えられます。

そこで、今回の研究はEGFR遺伝子変異陽性肺腺癌におけるサブタイプ別に臨床病理学的特徴と予後について明らかにすることを目的としています。さらに、各サブタイプ別に腫瘍組織や微小環境の特徴を明らかにするために、免疫染色法を用いて検討を行います。この結果から、各サブタイプ別に腫瘍組織や微小環境の特徴が明らかになることで、今後のEGFR遺伝子変異陽性肺がんの治療開発に大きく貢献すると考えられます。

目的：

今回の研究では手術で摘出されたEGFR陽性肺腺癌の各サブタイプ別に臨床病理学的特徴と予後について明らかにすることを目的としています。さらに、各サブタイプ別の腫瘍組織や微小環境の特徴を明らかにすることを目的としています。

方法：

2004年1月から2014年12月までの間に、当院にて完全切除されEGFR遺伝子変異陽性肺腺癌と診断された約230人を対象としております。また、100個の病理標本・ブロックを用いて、各サブタイプ別に臨床病理学的特徴と原発腫瘍の免疫組織学的検討を行います。対象となった患者さんの診療録から、その臨床病理学的特徴に関する必要な情報を収集し

ますが、情報収集の作業に当たる人員は医師をはじめとする医療知識のある研究者です。

個人情報保護に関する配慮：

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が特定されない方法で情報を収集します。研究患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申し出てください。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒277-8577 千葉県柏市柏の葉 6-5-1

国立がん研究センター東病院 呼吸器内科 猿渡 功一/ 石井 源一郎

FAX 04-7131-4724/TEL 04-7133-1111